雷３題

2022/2/15　井上達男

藤原岳の天狗岩と雷さん

中国にH先生と行くことになった。なまった体を活性化しないと中国でパイチュー（白酒）がうまくないと思ってハイキングに出かけた。H先生は大先輩で、今年の冬はアイスバイルにアイゼン姿で氷壁クライミングを楽しまれた。７５歳だが、盛んに身体を鍛えられているようだ。

藤原岳に向かう今日の私はジャージに軽登山靴、ナップサック姿の軽い気持ちであった。それでも雨具の上下が入っていました。最近、琵琶湖の分水嶺のPeak Huntingと称して周辺の山々のハイキングに精出している。まだ現役サラリーマンとして少ない休日をいかに利用するかに工夫しているが、あまり計画的ではないので大半は単独行である。

天気予報は、北の冷たい空気が流れ込んで滋賀県の北部は所々雷があるでしょう、と何気なく聞き流しているテレビから気になるフレーズが聞こえてきた。

果たして、藤原岳山頂にてわびしい昼食を摂っていると遠雷が聞こえ始めた。道標に導かれて1140mのPeakにやってきたのだが、地図を良く見ると最高点は西にある天狗岩1171mではないか。ここで雷に怖気づいて逃げ下るも勇気だが。そこで、天狗さんに会うために天狗岩に向かうは無謀、と悩みつつ藤原小屋に戻ると足は勝手に天狗岩に向かいだした。雷はなんとなく近づいている感じだが、まだ大丈夫と踏んだのが間違い。広々とした藤原岳の稜線を天狗岩についてとき、バリバリとすさまじいのが連発し始めた。雨はアラレに変わり、激しく吹き荒れる。雨具を持ってきたのは良かった、と思いつつ、やっぱりバカだったと反省するも時既に遅し。潅木しかない稜線では隠れる場所もなく、窪みから窪みに身を隠しつつ忍者歩きで小屋に戻る。すると、屋根に避雷針があるではないか!!

これは危険だ! 小屋は全体が鉄板で覆われている。落雷してよと言わんばかりの姿。遠巻きにしてとにかく稜線から急いで離れた。杉林に駆け込んだときはほっとした。すると雷は嘘のように止んで憎いことに青空も出てきた。

さっきの雷鳴はきっと天狗さんが私を追っ払ったんだ。ほっとした気持ちで降り立った麓には藤がきれいに咲いていた。

天狗岩から藤原岳

麓の藤原の藤と藤原岳

以上、2007年4月28日のこと。　Blogへの投稿でした。

ドカンと一発、妻走り出す

夏のユタ州は日の入りが遅い。単身赴任の私を訪ねて妻と子供たちが夏休みをユタで過ごした。明日は帰国の日だった。記念に皆で山に登ろうと午後になってから出かけた。クレイトン・ピーク(Clayton Peak 3250m)の頂に立ったのは午後５時４０分だった。

雷鳴の中急いで下る

ブライトン(Brighton)のスキー場に駐車して暑い中を登り始めた。暑さをしのぐためか、ドッグレークの水中に浸かって休んでいる雄のムース(ヘラジカ)に出会った。登山道はそこから樹林の中を東に進んで南西稜から頂上に登る。子供たちは元気だが、妻は辛そうにゆっくり登っている。「まだつかないの」と何度も聞く。もう登るのを止めたいようなそぶりだ。

何とかなだめて山頂に着いた。ガスがかかってきて長居は無用の気配になった。水分を補給していると、来た。

近くでドカン、と雷鳴。妻は何も言わずに慌てて走りながら下山を始めた。子供たちもそれに続く。

何度も雷鳴が響き、樹林帯に下るまでの数分は生きた心地がしない。安全だと思われる森の中に入ると皆で安堵する。体調のすぐれなかった妻はすっかり元気になっている。

1999 年 8 月 28 日の記録

青天の霹靂　山頂の昼寝は禁物

Mt. Nebo 3636m, Utah, U.S.A.

晴天が続く夏の一日だった。雲ひとつ無い天気で、Salt Lake City から南に 100ｋｍあたりにある Mt. Nebo 3636m を登ろうと車を走らせた。

よく乾いた Trail は土埃が上がるほどだった。山麓の周回路からまだ残っている雪渓に取り付いて稜線のガレ場に上がると頂上はすぐそこだった。風はなく穏やかな山頂で昼食を摂った。眼下にはちらほらと白い筋のような煙が昇っている。キャンプの焚き火かな、と暢気なことを考えていると眠くなってしまい横になった。

「ドカン」と一発大きな音がして目覚めると頭上に小さなキントン雲が二つ漂っていた。空は相変わ

らず晴天が広がっている。「ピカッ」「ドカン」がまた同時にやってきた。大慌てでリュックを背に這うように頂上から走り下った。樹木がまばらにあるコルまでは相当下らねばならない。立ち枯れた大木の窪地に逃げ込んで雷が遠ざかるのを待った。雨はパラリとも降らない。ようやく静かになって木を見上げると真っ黒に焼け爛れていた。以前の落雷にやられた跡だった。ここは雷の巣だったのだ。

駐車場に戻ると Forest Ranger が私の車を調べていた。「無事だったか」と握手をしてくれた。下山の道路は山火事で封鎖しているので暫らくここで待っていろと言われた。ヘリやセスナが消火剤や水を運んで森の消火活動を大々的に続けていた。

米国西部では今年(２０１２年)も日照が続いて山火事が頻発している。コロラドでは東京都の面積相当の山がすでに焼けてしまったという。

2001 年 7 月 4 日の記録

++

Salt Lake City の南東、Wasatch Mountains に Thunder Mountain という 340 6 m の岩山がある。雷山か、一つ登ってみるか、と、さして深く考えなかった。山頂に立って試しに磁石を岩の上に置くと北とは違う方角を指した。そこでなるほど、この山は落雷が多いのだと名前の由来に納得した。

後日、この山の近くの Lone Peak で二人の登山者が落雷に打たれて死亡したことをテレビのニュースで知った。山仲間に聞くと Wasatch では何度か落雷による事故があると言われた。

日本では、学生時代の夏山合宿でひどい雷雨に見舞われたことがある。立山の御山谷にテントを張っているときのことだ。この年は梅雨明けが遅く、入山してしばらく雨天が続いた。雷雨は梅雨明けの儀式のように強烈だった。テントの中で息をひそめていたが、体に帯電するのがわかると、すぐそばに何度も落雷する。テントのポールはたたみ、ピッケルや鍋などはテントから離して這い松の中に置いた。座っていると危ないと思い、シュラフに入って横になって雨雲が通り過ぎるのを待った。

思い起こせば何度も山中で雷に遭遇している。幸いなことにまだ命が無事でいる。